Annual Report

幼児教育における死へのアプローチ
デジタル紙芝居を通した保育専攻学生の「死」のとらえ方

高橋　一公（東京未来大学モチベーション行動科学部）

本研究は、保育専攻学生に対して「死」をテーマとしたデジタル紙芝居の視聴を通して、子どもに対して「死を教えること」への構えと、学生自身の「死への言及」についての考察を目的とした。デジタル紙芝居視聴後の自由記述による感想の内容を分析し、将来、幼児教育を担う学生のデス・エデュケーションに対する関心について検討を行った。その結果、保育学専攻学生の多くに、「死を教えること」に対する関心があることが示された。また、自由記述の内容分析において「死の教育の必要性」を示した学生は、幼児教育における「死や生（命）」の体験の必要性に関わる語の使用傾向が見られた。「子どもへの共感」を示した学生は、子どもの気持ちを「受容」するような共感的な語の使用傾向が見られた。これらのことから学生自身が保育場面で積極的に「死」に対峙し考察することが、子どもたちに「死を教えること」への動機づけとなる可能性が示された。

キーワード：死を教える、デジタル紙芝居、自由記述　計量テキスト分析

問　題

NewmanとNewman(1975)は死に対する態度の変化について論じている。学童前期においては生命が終わるという非可逆的な現象について理解できず、ある時点で人が死んでも次ぎの瞬間には再び生きていると考えてしまうとしている。学童中期には死はかなり現実的なものとして認識するが、死を自分や周囲に人と関連づけて考えることはできないようである。

NewmanとNewmanの指摘のように青年期まで死は現実的なものとして認識されていないという考え方が多いのも事実である。子どもの死の概念の代表的な研究にNagy(1948)のものがある。第1段階として5歳以下の子どもは死を取り返しのつかないこととは考えておらず、死の中に生を見ているとしている。第2段階である5歳～9歳の子どもたちは死を擬人化することが多く、死を偶然の事件として考えるとしている。さらに第3段階の9歳以上となると大人と同じように子どもは自然法則によって生起すると考える傾向にあるという。

仲村(1994)は、子どもは必ずしも死とは無縁な存在ではなく、大人とは同じ概念ではないが幼いなりに日常から知りえた死の概念を持っていると以下のように指摘している。

第1年齢段階(3～5歳)：生と死は未分化であり現実と非現実の死の意識ははっきりしていない。絵本やお話の中で得た知識が混じりあってその子どもの独自な死の概念を形成。

第2年齢段階(6～8歳)：死の現実的意味である普遍性、体の機能停止，非可逆性について理解。自分も含めて人間はいつか死ぬ存在であると気づき始める。

第3年齢段階(9～11歳)：普遍性、死の原因についての理解が進み，死が他人事から自分にも起こり得る現実的なものへの推移が示される。

第4年齢段階(12～13歳)：死の現実的意味を理解。死が身近なものとなり「死の原因」や「死後の世界」へ言及から、それに対する想像が膨らんでいく。

仲村は、現代の子どもたちは現実生活の中で死を体験するだけではなく、書物やテレビなどのマスメディアによってしばしば強烈な死の印象を与えられ、誤った死の概念の形成や強化の危険性を、そして健全な死についての認識を育てることの重要性を指摘している。

一方、子どもに接する大人たちは「死」をどのように子どもたちに教えていくべきなのであろうか。坂田・牧(2005)は幼稚園児に対する調査からDeath Education Program（死の意味と生命の尊厳を伝えるための“死に対する準備教育プログラム”）の導入時期に関して検討を行っている。子どもたちに死について伝える必要性を大人たちは感じているが、現実的な説明で伝えきれていないとしながらも、死の概念が形成される前の幼児期に体験を通して生や死について考えることができる“死に対する準備教育プログラム”の導入の必要性を示している。

また、工藤(2006)はいのちの尊さを教える手段として、「老い」や「死」をテーマにした絵本の読み聞かせにおいて、保育者自身の読解力の深さと重要性を指摘している。そして、保育場面で死や別れを扱った作品を読み聞かせる場合、①対象となる子どもが死の問題をどれだけ理解しているか（発達段階）、②子ども

が死の問題に直面した場合どのような反応を示すか、そして③絵本の世界が子どもたちにどのような影響をあたえるか、④保育者自身がその絵本からどのような影響を受けたか、という位置づけが重要であることを論じている。さらに、保育者を目指す学生の読解力不足と「死」にまつわる経験の不足についても言及している。

本研究においては、このような議論を踏まえて、保育学専攻学生の「死」に対する構えと、幼児期の子どもに対して「死」を教えることに関する基礎的な視点を探索することを課題とする。

目　的

保育学専攻学生が子どもに「死」を教えることに関してどのような考えを持ち、どのような記述をするのかについて、デジタル紙芝居視聴後の自由記述による感想を通して内容分析を行うことを目的とする。

方　法

対　象

保育学専攻の4年制大学2、3年生122名（男性19名，女性103名、今回は調査の制約上、年齢の聴取は行わなかった。概ね19歳から21才であり、平均年齢は20歳程度と思われる）。

調査方法

集合形式で調査を実施した。「生涯発達心理学」の講義において、映像内容についての事前説明はせずに、デジタル紙芝居「さよなら、みみちゃん」(鈴木 2013)を視聴させ、自由記述によって感想を記させた。同時に「生涯発達心理学」の講義内容について特に興味を持った授業内容についても回答を求めた。

刺激材料

デジタル紙芝居「さよなら、みみちゃん」を使用。「さよなら、みみちゃん」は鈴木によって学習教材として作成された11場面から構成される映像素材（約8分）である。また、SpeeceとBrent(1984)による子どもの死の概念の発達段階として「死の普遍性」「死の不可逆性」「無機能性」「因果関係」の4つを含んだストーリーが展開していく。

結　果

生涯発達心理学の関心領域

今回は生涯発達心理学の15回の講義内容のうち、特に印象深かった事柄に対して自由に記述をさせ、その記述内容から関心を持った領域（講義）を分類した。その結果、Table 1の通りであった。講義回数が比較的新しい中年期以降の内容に関心が多く集まっているとともに、乳幼児期や発達障害に関する講義にも関心が高いことも示されている。

Table 1　講義内容への関心

講義回数	内容	度数	相対度数
1	生涯発達心理学の基礎	6	0.049
2	成長・成熟の過程	5	0.041
3	生涯発達のプロセス	3	0.025
4	胎児期から新生児期	7	0.057
5	乳幼児の発達	10	0.082
6	幼児期の機能と発達	10	0.082
7	幼児期の社会性	2	0.016
8	児童期の発達	3	0.025
9	発達障害	10	0.082
10	青年期の特徴	5	0.041
11	青年期から成人期へ	4	0.033
12	家族の形成と発達	7	0.057
13	中年期の発達と危機	14	0.115
14	エイジングと心理的変化	15	0.123
15	「死」への対応	20	0.164
	不明	1	0.008
	計	122	1.000

デジタル紙芝居に対する感想内容のカテゴリ化

「さよなら、みみちゃん」を見た感想について、「死の体験」「死の教育の必要性」「子どもへの共感」「保育者の対応への関心」「否定的見解」「死への恐怖」「援助の必要性」「命の重要性」という8つのカテゴリを設定し、その記述内容がこの8つのカテゴリ毎に該当するものと非該当のものに分類した（Table 2）。それぞれのカテゴリの代表的な記述は以下の通りである（文章の一部抜粋、表現については改編）。

○死の体験（自らの死の体験との重ね合わせ）
「飼っていた犬が死んだときは本当に辛くて泣いた」「おばあちゃんが死んでしまい悲しかった気持ちを思い出した」

○死の教育の必要性（子どもに対する死の教育の必要性）

「生き物にはいつかは死が訪れるということを、ぜひ子どもに伝えておきたい」「生と死を小さいうちから学ぶ必要があると思う」

○子どもへの共感（子どもの感情への共感）

「ずっと大事に育てていたうさぎが”死んでしまって”とても悲しそうなのがわかり、私も悲しい気持ちになった」「かわいがっていたうさぎが突然死んでしまって、子どもたちはびっくりしたと思う」

○保育者の対応への関心（保育者への対応への関心や疑問）

「園長先生の伝え方は子どもが納得できるものだと思いました」「先生がどう伝えるのによって理解の仕方が変わるなぁと感じました」

○否定的見解（死への接近や死に至る過程への疑問）

「子どもたちは、死について理解できているのか、疑問に思った」「死が理解できない部分があるのでオブラートにつつんで説明した方がいい」

○死への恐怖（死の対する恐怖や不安）

「死というものを知って理解できるが由の怖さに変化していることにも気がついた」「死ぬことはとても悲しくて怖いことだなと感じたことを思い出した」

○援助の必要性（死に接した子どもたちに対する援助・支援の必要性）

「子どもたちの悲しくなってしまった心をどうケアしていけばよいのかを考えさせられた」「その死を受け止められるようになるには、周りの大人が、しっかりと配慮した対応をする必要がある」

○命の重要性（死を通して命の尊さへの言及）

「命の大切さやはかなさを自然に理解することができると思いました」「園などで動物を飼うことで、生き物の死について、また命の大切さについて学ぶことができると思う」

Table 2 記述内容の分類

カテゴリ	該当	非該当	計
死の体験	13	109	122
死の教育の必要性	47	75	122
子どもへの共感	47	75	122
保育者の対応への関心	40	82	122
否定的見解	11	111	122
死への恐怖	12	110	122
援助の必要性	8	114	122
命の重要性	25	97	122

自由記述の計量テキスト分析

自由記述に見られる表出言語が記述内容のカテゴリ毎に特徴がみられるかについて計量テキスト分析を行った。分析には樋口ら(2009)のKH Coder(Ver.2.beta.32)を利用した。今回の自由記述から855語の異なり語数が抽出された。

今回は紙面の関係上、「死の教育の必要性」、「子どもへの共感」および「保育者の対応への関心」を外部変数として取り込み、それぞれの共起ネットワークを可視化することを試みた。

(1)抽出語の出現頻度

自由記述から抽出された語の出現頻度は表3の通りであった。頻出語としてやはり「死」「死ぬ」が目立つとともに、「子どもたち」「子ども」といったデジタル紙芝居上の主人公（“みみちゃん”、“てつやくん”など）に関わる語、および記述者の情動に関わるような語が多いことが示されている。

Table 3 自由記述頻出語一覧

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	230	飼う	23	いつか	14
死	179	生き物	23	説明	14
みみちゃん	118	映像	22	体験	14
死ぬ	116	知る	22	良い	13
子どもたち	94	てつやくん	21	小さい	12
子ども	73	先生	20	心	12
感じる	71	園長先生	19	分かる	12
悲しい	49	自分	18	亡くなる	12
理解	35	受け止める	17	一緒	11
大切	34	辛い	17	経験	11
動物	32	難しい	17	少し	11
伝える	31	育てる	16	幼稚園	11
命	31	教える	16	今	10
気持ち	28	受け入れる	16	存在	10
考える	28	身近	16	大事	10
学ぶ	25	大人	16	直面	10
見る	25	悪い	15		
		元気	15		

(2)自由記述における共起ネットワークの特徴

自由記述から抽出された855語の異なり語のうち出現頻度が5以上のものに対して共起ネットワークの可視化を試みた結果、Figure 1の通りとなった。

主なノードのリンクとして、「死ー死ぬー思うー子どもー感じるー悲しい」、「大切ー命ー知るー学ぶー大切」、「伝えるー難しいー受け入れるー大変」、「幼稚園ー別れー飼うー園児たちー人間」「天国ー行くー生き返るー自分たちー存在ー変化ー気づく」、「思い出すー怖いー今ー生きる」などが見られた。
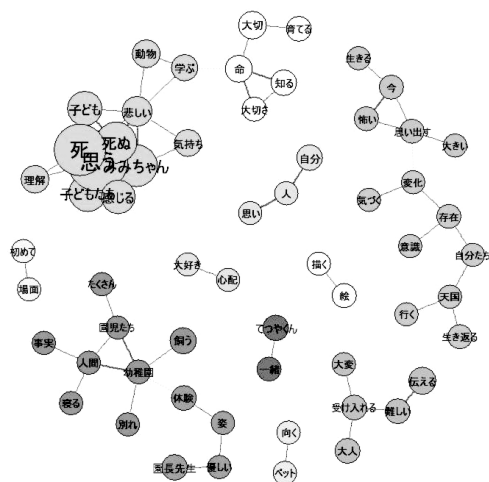
Figure 1　頻出語の共起ネットワーク

(3)「死の教育の必要性」を外部変数とした共起ネットワークの特徴

記述内容から「死の教育の必要性」への言及の有無によってカテゴリ化したものを外部変数として取り込み、その有無によって共起性に特徴が見られるかについて可視化を試みた結果、Figure 2の通りとなった。
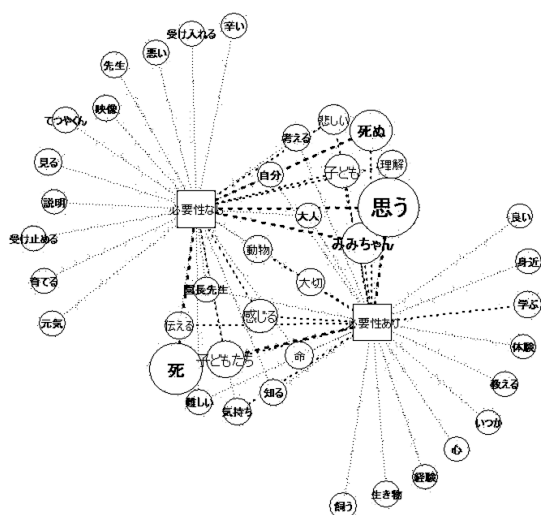
Figure 2　「死の教育の必要性」と共起ネットワーク

死の教育の必要性に言及したグループでは、「生き物」「飼う」「経験」「身近」「学ぶ」「体験」などのノードと、必要性に言及していなかったグループでは「受け入れる」「辛い」「説明」「受け止める」「育てる」などのノードとのリンクが見られた。

(4)「子どもへの共感」を外部変数とした共起ネットワークの特徴

記述内容から「子どもへの共感」への言及の有無によってカテゴリ化したものを外部変数として取り込み、その有無によって共起性に特徴が見られるかについて可視化を試みた結果、Figure 3の通りとなった。
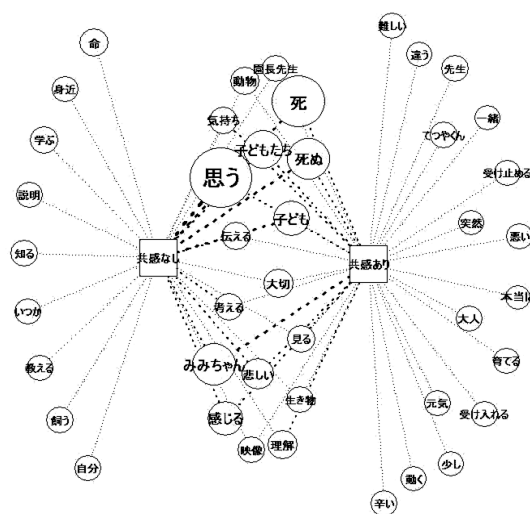
Figure 3　「子どもへの共感」と共起ネットワーク

デジタル紙芝居中の子どもたちへの共感を示した記述が見られたグループでは、「難しい」「一緒」「受けとめる」「受け入れる」「育てる」「辛い」などのノードと、共感の記述が見られなかったグループでは、「学ぶ」「説明」「知る」「教える」「飼う」などのノードとのリンクが見られた。

(5)「保育者の対応への関心」を外部変数とした共起ネットワークの特徴

記述内容から「保育者の対応への関心」への言及（デジタル紙芝居の登場する園長先生、幼稚園教諭の言動に対する記述）の有無によってカテゴリ化したものを外部変数として取り込み、その有無によって共起性に特徴が見られるかについて可視化を試みた結果、Figure 4の通りとなった。

保育者の対応に関心を示したグループでは、「話す」「伝える」「説明」「優しい」「素直」「聞く」「難しい」などのノードと、保育者の対応に関する記述が見られなかったグループでは、「知る」「いつか」「辛い」「学ぶ」「育てる」「受け入れる」「体験」などのノードとのリンクが見られた。
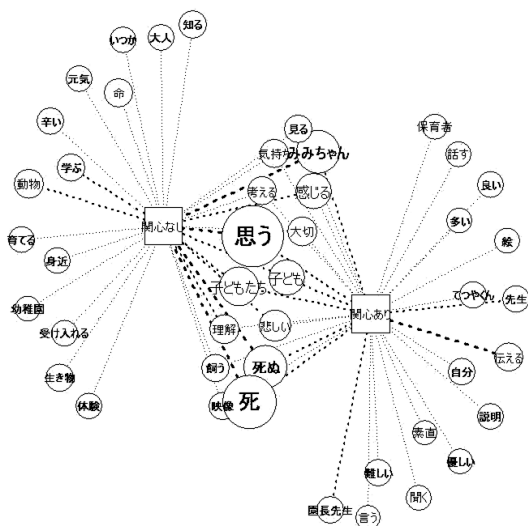
Figure 4　「保育者の対応への関心」と共起ネットワーク

考　察

今回の研究では保育学専攻学生が「死」を教えることに対してどのような考えを持っているのかについて、デジタル紙芝居「さよなら、みみちゃん」を通して検討することを試みた。また、刺激映像に対する自由記述という全く制限を与えない回答方式を使用したことから、なるべく恣意的にならない分析手法として計量テキスト分析を用いた。

生涯発達心理学への関心領域

保育学専攻の学生であるため、当初乳幼児期に関わる領域に関心が集まることが予想された。しかし、中年期以降への関心が約40%を占めていた。本調査が15回目の授業で行われたこともあり、授業回数後半に対するコメントのしやすさがあったこと、本調査で映像素材を用いたことで「死」に対する関心が高まったことなどの影響も否定することはできない。

いずれにせよ、「死」をテーマにした授業に対するニーズは決して低くないことも確認された。

感想内容のカテゴリ化

「死の体験」「死の教育の必要性」「子どもへの共感」「保育者の対応への関心」「否定的見解」「死への恐怖」「援助の必要性」「命の重要性」という8つのカテゴリを設定し、学生の自由記述の内容からその有無についてのみから分類を試みた。特に「死の教育の必要性」「子どもへの共感」「保育者の対応への関心」について触れた学生が他のカテゴリより多くみられた。

(1)死の教育の必要性の記述

「死の教育の必要性」については約38.5%にそれに類する記述が見られた。「動物の死」という日常生活の中で比較的経験しやすい事柄ながら、映像中の子どもたちの「先生、みみちゃん起きないよ？ どうしたの？」「みみちゃんは、悪いことをしたから、死んじゃったの？」「僕も死んじゃうの？」などの素朴な反応に対して、子どもが「死」の概念を確立できていないということを前提として、「死」を教えることや「死」に接することの重要性について記述したものが多くみられた。「死んでしまったということを実際に体と目で体験させていたことがすごく大切だと思った」「生と死について学ぶこと、知ることができないと、悲惨な事件、事故を生んでしまうことになってしまうと思います」などでも示されているように、「死」に接する体験が逆に「命」の大切さにつながるものとする記述が多く見られた。

(2)子どもへの共感の記述

「子どもへの共感」については約38.5%にそれに類する記述が見られた。子どもの心情に対して「悲しい」「辛い」などの表現を用いて共感をする内容のものが多く、子どもへの共感を通して「死」について間接的に触れている内容のものが見られた。なかには「大人が受け止める『死』と子どもたちが受け止める『死』は少し違った意味なのではないか」と発達段階によって死の概念が異なっていることに言及している記述もいくつか見られた。これらの記述内容は、単に子どもへの共感ということだけではなく学生自身の「死」に対する感情を投影していると考察できる。

(3)保育者の対応への関心の記述

「保育者の対応への関心」では、学生自身が映像中の保育者の対応について、自身が同様の状況に遭遇した場合のモデルとして位置づけていることがうかがえる。「しっかり話してあげる」「受け止めてあげる」という表現に代表されるように、「死」を隠すことよりも、保育者自身が「死」に向きあうことや「死」について考えておくことの必要性に言及しているものと思われる。

計量テキスト分析の結果

(1)頻出語の共起ネットワーク

今回は映像素材の視聴に関して学生に対して、「死」をテーマにしているという先入観を入れないために、事前に内容について説明することを敢えてしなかった。このような条件で得られた記述内容について計量テキスト分析を行ったところ前述のような結果が得られた。

頻出語の共起ネットワークで得られたように、「死」というキーワードを中心としたノードが形成されており、リンクするものとして「子ども」「悲しい」「思う」「感じる」などがあげられる。映像を見た印象として「子どもたちが死を悲しく感じている」という、子どもの立場に立った記述内容が強く示されていると思われる。また、「命の大切さを知る、育てる」や「伝える、受け入れることは大変難しい」というような保育者の立場からみたデス・エデュケーションに関わる記述もノードのリンクから見て取ることができる。

これらは、記述内容の主観的なカテゴリ化において「子どもへの共感」や「保育者の対応への関心」などへの記述が多くみられたこととも一致している。保育士・幼稚園教諭を志すものとしての「死」への関わり方を示すものとして興味深い。

(2)「死の教育の必要性」を外部変数とした共起ネットワーク

自由記述の内容から、「死の教育の必要性」に言及の有無を外部変数として共起ネットワークを作成したところ、その必要性に言及したグループでは、「生き物」「飼う」「経験」「身近」「学ぶ」「体験」などのノードと、必要性に言及していなかったグループでは「受け入れる」「辛い」「説明」「受け止める」「育てる」などのノードとのリンクが見られた。

必要性に言及しているグループでは、「生き物の飼育経験や身近な体験・経験を通して『死』について学ぶ」ことが有益であるとする共起性が見られるのに対して、必要性に言及していなかったグループでは、「死の事実を受け入れること、説明をして教えていくことが有益である」という共起性が見られ、「死」の教育に対するアプローチの違いがうかがえる。「死」を教えることに対して、「生（命）」を通して体験的に取り組むことを幼児教育に取り組もうとする姿勢が見られる一方、事実を受け入れ、説明していくことで「死」に対する態度を育てるとする方法論の違いとして示されているのではないかと考えられる。

(3)「子どもへの共感」を外部変数とした共起ネットワーク

「子どもへの共感」に関する記述の有無を外部変数として、共起ネットワークを作成したところ、共感を示した記述が見られたグループでは、「難しい」「一緒」「受けとめる」「受け入れる」「育てる」「辛い」などのノードと、共感の記述が見られなかったグループでは、「学ぶ」「説明」「知る」「教える」「飼う」などのノードとのリンクが見られた。

共感を示したグループでは子どもの心情に対して受容的な語の使用が見られ、「死を教えることは辛く難しいが、一緒に受けとめて死に対する態度を育てる」とする記述内容が示されている。これは子どもへの共感を通して、子どもと共に「死」について考えていこうとする学生の心情が示されたものと思われる。

共感的な記述が見られなかったグループでは「死を身近なものとして知り、死を説明して教える」とする内容が示されている。これは「死」という事実に対してしっかりと説明し、子どもに教えることが必要とする学生の意識の表れと考えることができる。

(4)「保育者の対応への関心」を外部変数とした共起ネットワーク

「保育者の対応への関心」に関する記述の有無を外部変数として、共起ネットワークを作成したところ、結果で示されたようなノードとのリンクが見られた。

保育者の対応への関心を示したグループでは、記述内容の主体が保育者を表す語（園長先生、先生、保育者）とともに、「伝える」という語が特徴的なリンクを示していた。このことからも考察できるように、「保育者の対応への関心」を示した学生は映像刺激の中に登場する保育者を「死を教えること」のモデルとして捉え、その伝え方に関して強い関心を示したものと思われる。

一方、保育者の対応に関する記述が見られなかったグループでは「学ぶ」「受け入れる」「知る」「体験」というノードとのリンクとともに、「死」「死ぬ」「みみちゃん」という語とのリンクが関心を示したグループよりも強い傾向が見られた。これは自由記述内容が

「死」というテーマに直接的に言及していることを示し、学生の関心が幼稚園における「死」というイベント自体に向けられた結果ではないかと思われる。

おわりに

刺激映像は子どもたちが幼稚園で飼っていたうさぎの死を通して、死に対する疑問や不安が描かれている。この映像を保育学専攻の大学生がどのように捉え、「死」というテーマについてどのような言及をするのか、さらに将来の保育者として子どもたちに「死」を教えることに対する考慮に何らかの傾向が見出せるのか否かに焦点を当てて考察を進めた。

学生自身が「死」に対して困惑している段階であることを考えると、子どもに「死を教える」ということの難しさを感じていることが記述内容から読み取ることができた。特に小さな子どもが「死」と接したときの大人の対応や「死を教えること」については、デジタル紙芝居であることは理解しながらもそこに登場してきた保育者の対応をモデルとする記述が多く見られた。これは学生自身がこれまで「死を教えること」について触れてこなかったことの象徴として考えることができる。

「死」をテーマとした教育は、学生それぞれに与える印象は異なっている。しかし、これまで忌嫌われてきた「死」という現象を小さな子どもの目を通して知ることで学生自身も「死」に対する新たな視点を発見したのではないかと感じている。今回、計量テキスト分析を用いて語の共起性についてのアプローチを試みた。特に「死」について子どもからの視点で記述するのか、あるいは保育者の視点から記述するのかで特徴的なリンクが認められたことがその新たな視点を示唆していると思われる。

最後に、保育学・幼児教育を専攻する学生であっても決して学問的興味が乳幼児期に集中しているわけではなく、むしろ中年期から人生の最期に至るプロセスに興味関心を持っている学生が多いことも個人的な収穫であったことを加筆しておきたい。

引用文献

樋口耕一 (2006). 内容分析から計量テキスト分析へ ー継承と発展を目指してー 大阪大学大学院人間科学研究科紀要 **32**,1-27.

工藤真由美 (2006). 保育者の絵本理解に関する一考察 ー「老い」や「死」をテーマとしてー 四条畷学園短期大学紀要 **39**,13-19.

仲村照子 (1994). 子どもの死の概念 発達心理学研究, **5**,61-71.

Nagy,M. (1948). The child's theories concerning death. *Journal of Genetic Psychology,* **73**, 3-27. 大原健士郎 勝俣瑛史 本間修（訳）(1973). 死に関する子どもの見方 Herman,F.（編） 死の意味するも (pp.89-101). 岩崎学術出版.

Newman,B.M. and Newman,P.R. (1975). Development through life: A psychosocial approach. Homewood: Dorsey Press. 福富護 伊藤恭子(訳). (1980). 生涯発達心理学 川島書店.

坂田和子、牧正興 (2005). Death Education Programの導入時期に関する検討 福岡女学院大学紀要. 人間関係学部編 **6**, 23-27.

Speece,M.W., & Brent,S.B. (1984). Children's understanding of death : A review of three components of a death concept. *Child Development,* **55**, 1671-1686.

鈴木哲也(2014) デジタル環境紙芝居の概要と指導案 平成25年度足立区環境基金助成「足立区の環境を対象にしたデジタル紙芝居の作成における基礎的研究」研究成果報告書兼取扱説明書

高橋一公 (2014). 「死」への対応 死に対する態度と準備 高橋一公 中川佳子（編） 生涯発達心理学15講 (pp.179-187). 北大路書房.

“KH Coder”については、http://khc.sourceforge.net/index.htmlを参照されたい。

謝　辞

今回の研究にあたって、東京未来大学こども心理学部鈴木哲也先生からデジタル紙芝居「さよなら、みみちゃん」の映像素材を提供していただきました。鈴木先生にはこころから感謝いたします。

（受稿2015年1月11日　受理2015年1月30日）

Approach to the death in early childhood education
Analysis of the view of "Death" of the students majoring in early child care and education through a digital picture-card show

Ikko TAKAHASHI (School of Motivation and Behavioral Sciences, Tokyo Future University)

In this study, the author aimed to consider the teaching style of “death” to the children, and the early child care and education major students‘ own “references to death,“ through watching the digital picture-card show on the theme of “death.” The contents of the students’ the free description after watching a digital picture-card show were analyzed. And the concern about death education of the students who contribute to the early childhood education field in the future was also examined. As a result, the students majoring in early child care and education are interested in “teaching death.” In addition, these students, who described “the necessity of death education” on their free description, had a tendency using the words about the necessity for the experience of “death and life” for early childhood education. Furthermore, the students who showed “sympathy to a child” had a tendency using sympathy words which accept a child’s feeling. Thus, this study shows the possibility that confronting “death” in childcare situation makes the students give the motivation to “teaching death” to the children.

Keywords : teaching death, digital picture-card show, free description, quantitative text analysis